

## 意味志向の充実化とは何か

葛谷 潤

### はじめに

本稿の目的は、『論理学研究』(1900/01, 以下『論研』)におけるフッサールの意味概念を、充実化条件として、より具体的には方法・手続きとして解釈することを通じて、意味志向の充実化という彼の認識概念がいかなるものであるかを明確にすることである。

『論研』におけるフッサールにとって、認識とは意味志向の充実化であるとされる。この意味志向とは基本的に表現理解の作用、つまり表現の意味を把握する作用である。そして充実化とは、典型的には何らかの対象の知覚作用によってなされるものであり、意味志向と対応する直観の合致であるとも表現される。したがって、意味志向の充実化としての認識とは、表現理解において把握された命題内容や名辞の意味が、知覚作用によって顕示、正当化されるという認識実践を記述したものとしてみとまず理解できるだろう<sup>1</sup>。さて、「合致」と言われることから明らかなように、充実化のための意味志向と直観の組み合わせは任意ではない。したがって、この両作用が合致するための条件とはいかなるものなのかが問題となるだろう。フッサールによれば、意味志向と直観はどちらも、彼が質料や意味、統握意味と呼ぶような理念的存在者(以下「意味」として統一)を例化している。そして、意味志向を直観が充実化しうるのは、意味志向と直観が同一の質料を例化しているとき、かつそのときに限る、とされる。しかし、この定式化が充実化の十分な説明になっているのは、意味志向と直観が同一の質料を例化しているとはいかなることかについて明晰な把握が提供された場合のみである。しかし、この点における踏み込んだ説明は、近年になってようやくいくつかの試みがなされるようになってきたという段階である。

以上の背景を受け、本稿は、意味志向と直観とが同一の質料を例化している